

論文の要約

報告番号	① 乙 医 第 1225 号	氏名	山本 伸昭
学位論文題目	Predictors of neurological deterioration in patients with small vessel occlusion, infarcts in the territory of perforating arteries		
<p>徳島大学病院に入院している脳卒中患者のデータベースを作成し、それをもとに研究を行った。脳梗塞の病型には TOAT 分類が用いられることが多いが、今回はそのなかでも Small vessel occlusion (SVO) に注目した。SVO の患者の中には入院し治療を行っているにもかかわらず症状の進行が見られることがまれではない。症状の進行に伴い、重大な後遺障害が残存し、長期的なリハビリテーションが必要になる場合がある。進行に関与する因子を知ることは、より積極的な治療を行うかどうかの判断や患者の予後予測にとって重要な情報であるため、どのような因子が関与していたかを検討することにした。</p> <p>対象は 2008 年 4 月から 2012 年 7 月までに徳島大学病院脳卒中センターに入院した SVO と診断された連続 110 例（男性 71 名、女性 39 名、平均年齢 69.2 歳）を対象とした。入院時の臨床症状、既往歴（高血圧、糖尿病、慢性腎疾患、脳梗塞、脂質異常症、悪性腫瘍）、嗜好歴（アルコール摂取、喫煙）血液データ、放射線学的検査所見（梗塞巣の最大径、梗塞巣の陽性 Slice 数、脳内微小出血の有無、Fazekas 分類に基づく Periventricular hyperintensity Grade）を進行例、非進行例の 2 群間で比較した。単変量解析で p 値が 0.2 以下の因子については多変量解析を行った。結果としては年齢、脳卒中の既往歴、喫煙歴、MRI で梗塞が認められた Slice の数と最大径、periventricular hyperintensity の重症度で差が認められた。それらを多変量解析で解析すると PVH grade が 2 以上 (Odds ratio 6.72、$p=0.006$)、脳梗塞の既往がないもの (Odds ratio 0.21、$p=0.049$) が独立した因子であった。また PVH grade が高い患者ほど退院時の NIHSS scale が高い傾向があった。PVH grade がより重症である患者は、高血圧や糖尿病などを Subclinical に合併している可能性があると考えられた。脳梗塞の既往がある患者は進行例が少ない結果になったが、原因としては抗血小板薬を発症時にすでに内服していることが関与していると考えられた。本研究は後方視的であること、患者ごとに治療が異なることなどが Limitation として挙げられる。しかし PVH grade が神経症状の悪化に関与し、神経症状の悪化の予測因子になりうることを示された。</p>			